

## 関東大震災を歩く：現代に生きる災害の記憶

### Search for evidences from the Great Kanto earthquake in the 23 wards of Tokyo

武村 雅之<sup>1\*</sup>

TAKEMURA, Masayuki<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> (株)小堀鐸二研究所

<sup>1</sup>Kobori Research Complex Inc.

関東大震災による東京の火災を調査した東京帝国大学物理学教授の中村清二は報告書の中で次のように述べている。「同じ失敗を何度となく経験しても吾々は一向賢明にならなかったのである。大八車が自動車にかわることはあろうけれども。」江戸時代にあった火災時の家財道具の持ち出し禁止の掟を忘れ、多くの人々が避難場所に大八車で大量の家財道具を持ち込んだ結果、38000人の死者を出した陸軍被服廠跡に代表される大惨事を各所で招いたことへの無念な気持ちと、今後訪れるであろう車社会への警告の言葉でもある。去る3月11日の東日本大震災に際して、首都圏ではまさに中村清二の予言通りのことが起こった。道路という道路を、帰宅を急ぐ車が埋め尽くし史上最大の渋滞が発生したのである。一度火災が発生し自動車に引火すれば、大惨事につながったことは間違えない。

津波からの避難もそうであるが、なぜこうも我々は過去の震災経験を忘れてしまうのだろうか？悲惨な出来事は出来るだけ早く忘れたいというのは人情であるにしても、地震が再来するという事は寺田寅彦に指摘されるまでもなく誰しもが分かっているはずである。私はこの問題を解決するためのポイントは非日常的な震災経験を人々の日常生活の意識の中に組み込む方策を見つけることではないかと思ってきた。

そんなことを考えながら東京の街を歩いて見ると、今でも様々なところに関東大震災の慰霊碑や記念碑などが残っていることに気が付いた。それらは震災の悲惨さを我々に伝えるものであると同時に、歴史的苦難を必死で乗り越えた当時の人々の強さや優しさも感じさせてくれる。様々な痕跡を探し歩くうちに、いずれもが、我々の平安な日常を祈ってくれているようにさえ思えてきた。このような気付きが23区内をくまなく歩く調査のきっかけであった。

そこで見つけた物は、慰霊碑、記念碑、多くの犠牲者が出た場所と逆に多くの避難者の命を救った場所、さらには震災で破壊された跡またはその再生を伝えるもの、復興過程で生まれた建物や施設などである。一方、震災後の帝都復興事業による土地区画整理は、東京に1657(明暦3)年の明暦の大火以来、実に270年ぶりのお寺の大移動をもたらした。幕末以来受難続きのお寺にとって、想像を絶する負担であったが、お陰で江戸の多彩な文化が、都市化によって朽ちることなくひっそりと郊外各地に今も息づいている。そして、最後に、関東大震災以前から江戸・東京をたびたび襲った自然災害についての記念碑や遺構も調査した。関東大震災が初めての災害ではなく、過去の災害経験が忘れ去られていたことが関東大震災の被害をこれほど大きくしたと考えたからである。

調査結果は3月1日、東日本大震災一周年を前に一冊の本にまとめることができた(吉川弘文館発行)。表題はその書名である。拙著を手に23区内を是非とも歩いて欲しい。関東大震災が分かると共に、一方で我々が暮らす東京の大切さも実感することができるだろう。それこそが、東京を来るべき地震から守る減災への第一歩となるものと信じている。今もひっそりと佇む、関東大震災の慰霊碑や記念物、復興のモニュメント。人びとはどのような思いで死者を弔い、どのようなビジョンを持って瓦礫の街を蘇らせたのか。

日本各地には、震災だけでなく火山災害や風水害など様々な記念碑や遺構が残されている。それらを元に一般市民に自らの足許を見つめ直してもらうこと。そのことが、来るべき災害に“未曾有”の称号を与えない近道ではないか考える。今回の成果が、そのような活動を広げる端緒になれば幸いである。